

日本山岳会百年史[本編]より

## 山岳會設立の主旨書

凡そ山岳が、一國の地文及び人文に、影響することの大なるは、今俄に説くを要せず、之を歴史に攷ふるに、日本の文化は先づ近畿中國の山脈間に、印度の文明は、早く雪嶺山下に發達し、支那の美術は、北嶺山脈の秦嶺間に、希臘の藝術は、ピンドス山脈の峽間に起り、伊太利、佛蘭西、日耳晶又諸邦は、皆アルプス山下に強を成しぬ。宗教を言へば、昔者モーゼ「シナイ」の高峰に立ちてエホバ神より無限を學び、基督も亦山上に終夜祈禱して、十二使徒に力を授けたりと傳へらる、釋尊の雪山に於ける、日本の名僧が到るところの山岳を、道場となせる、其例擧げて算ふるに違あらず、殊に日本は、山岳國中の山岳國にして、名山の森列、宇内に比儔罕なりと稱せらる、我邦上下幾千載の歴史は、實に皆この國內を、縦横脈絡せる巨人脚上の演劇のみ、山岳の人生に相渉ること斯の如し、故に苟くも地人の干係を窮めむと欲するもの、溯りて山岳に入らざるはあらず、是を以て、歐洲アルプスの如きは、科學、文學、藝術、諸方面研究の中心點となり、最高級となり、詩人バイロン、ワーズワース等も之を踏破し、チンダル、フンボルト等、其他の諸碩學、又之を登攀し、今より四十九年前に、アルプス俱樂部なるものゝ設立を見るに至り、登山の氣風今や諸洲に普遍して、壮佼は素より、老人婦人にまで及び、嚮導者は特定の校堂にて養成せられ、道路は開拓せられ、精細なる地圖紀文は出版せられ、其山岳研究の盛なるは、殆ど邦人意想の外に在り、彼等は斯の如く、山岳を對境として、氣品を高尚にし、意志を強固にし、身體を剛健にす、我邦人鑒みて可ならんか、抑も本邦の山岳は、高度聊かアルプスに及ばずと雖も、自然の長城凸几歪迂して、高く天半を斷せる某々山脈の絶大觀は決して彼に讓らざるのみならず、百般の變化は却って彼に超忽たりと稱せらる、しかも憾むらくは、一般邦人、山岳の知識を缺き、地理書類中、我が山岳に關する記事は往々之を外人の述作より、剪裁するものあるを見るを、斯の如きは、實に本邦學界の不備と言はざる可らず。

夫れ高山に登るは、即ち天に近づくなり、空氣の密度、壓力、温度、平地と異なり、氣圈の色は、透明藍色を呈し、朝暉夕陰の美、雲霧風雨の豪壯を觀察するに、至便なるは言を俟たず、動物植物も、次第に下界の物と趣を殊にし、本邦中央の高山大岳にして、蝦夷千島産の物を見ること、尠きにあらず、其他仰いで星辰を窺ひ、俯して地質を察する等、山に入らずんば、研究し能はざるもの、甚だ多し。空間を以て言へば、天地を接するものは山なり、時間を以て言へば、四季の循環を一日に經驗し得るものは山なり、處間を以て言へば、數

百千里に亘れる水平線上の物を、直立體に分布して、雨三日に究め得らるゝものは又山なり、自然が刷ける色彩、自然が放てる光澤の、純粹なるものは、最も山に饒多にして、自然が意匠し、彫刻せる形體劃線、又山を以て最も變化萬千となす、故に山角に立つは、絶對の一端に佇みて、絶對の秘奥を覗ふが如し、人生何物の高快か之に如かんや、惟みるに、山は實に不朽の壽を有する理想的巨人なり、天火を以て鑄られたる儀表的銅像なり、全國民の重鎮として立てられたる天然的柱石なり、之を謡ひ、之を究むるは、永世の大業にして、且つ何ぞ今日不急の事と謂はむ、本會こゝに見るところあり、微力自ら測らずして、先ず歐洲の **The Alpine Journal** の例に倣ひ、山岳専門の機關雜誌「山岳」を發刊し、山岳に關する考察紀事、一切を網羅し、山岳趣味と知識の啓發に任せんと欲す、然れども本會の事業たる、華に雜誌發刊の事に止むべきにあらず、山中に登山者宿泊の小舎を立つるも可なるべく、登山新路を拓くも可なるべく、全國に亘りて山岳案内記を出版するも可なるべく、各登山者間に連絡を通ずる方法を講ずるも亦可なるべし、為すべきこと極めて多くして、未だ一も其緒に就きたるはあらず、之を大成するは、一に趣味嗜向を同じうする、諸君子の援護に待つのはある可らず、蓋し是れ實に國民的事業にして、決して少数人士の能く為し得るところにあらざればなり、即ち本會成立の主旨を略記して、偏に大方の贊助を懇請するものなり。

明治三十九年四月五日

## 山 岳 會

發起人(イロハ順)

河 田	黙
高 頭	式
高 野	鷹 藏
武 田	久 吉
梅 澤	親 光
小 島	烏 水
城	數 馬

## 「山岳会設立の主旨書」について

前掲「山岳会設立の主旨書」は一九〇六(明治三十九)年四月発行の『山岳』第一年第一号の巻頭に載ったものである(原文どおり。ただし、明らかな誤植は訂正した)。「山岳会設立の主旨書」については、『山岳』誌上での発表に先立って、同年二月発行された高頭式の『日本山嶽志』に別刷りで付録のような形で添付されたほか、文芸雑誌『文庫』一八三号(同年三月発行)の「山岳會設立に就きて」(小島烏水)と題する記事中にも全文が紹介されている。また、それとほぼ同時期と思われるが、小島烏水は「主旨書を数百部印刷して方々に配った」

(「山の因縁五十五年」)ともいい、こうした形で世の中にアピールされた。草稿は小島烏水によるものであるが、今日では分かりにくい部分もあるので、以下にその大意を載せておく。

「山岳が一国の大地の状態や文化に大きく影響していることはいうまでもない。日本の文化は近畿・中国地方の山並みの間に、インドの文明はヒマラヤの雪嶺の下に発達した。中国の美術は秦嶺山脈の間に、ギリシャの芸術はピンドス山脈の峽間に起こり、イタリア、フランス、ドイツの諸国は皆アルプスの下に強国となった。モーゼはシナイの高峰に立ってエホバ神より無限を学び、キリストもまた山上に終夜祈禱して十二使徒に力を授けたと伝えられている。釈迦が雪山において、また日本の名僧が山岳を道場としたなど、その例は数えるにいとまがないほどである。ことに日本は山岳国中の山岳国であり、名山の多く並ぶ様はあまり例がないといわれる。わが国の幾千年の歴史は、この国内に縦横につらなる巨人の上で劇を演じてきたようなもので、山岳が人生にかかわるとはこのようなものである。であるから、大地と人間の間を究めようとするならば山岳に入るべきである。

ヨーロッパでは、山岳は科学、文学、芸術など諸方面の研究の中心であり、バイロンやワーズワースらも山を踏破し、チンダル、フンボルトその他の碩学も山に登攀した。四十九年前にはアルパインクラブの設立を見るに至り、登山の気風はいまや諸国に広がって、老人、婦人にまで及んでいる。ガイドが養成され、登山道が拓かれ、詳しい地図や紀行が出版され、山岳研究の盛んなこと、わが国では考えられないほどである。彼等は山岳を対象として、気品を高尚にし、意志を強固にし、身体を剛健にしている。わが国の山岳は高度においてはアルプスに及ばないが、自然の長城が峻しく聳え、山並みの絶大感を決して劣らないばかりか、いろいろな方面の変化はかえって優れているといわれる。高山に登るということは、天に近づくことである。空気の密度、圧力、温度が平

地と異なり、大気の色は藍色を呈し、朝夕の美しさや雲霧風雨を観察するのに便利であることはいうまでもない。

動植物も下界の物とは趣きを異にし、わが国中央の高山で北海道や千島産の種類を見ることも少なくない。星座や地質の観察等、山に入らなければ研究することができないことは多い。天と地を接するのは山であり、四季の循環を一日で経験することができるのは山である。数百里にわたる水平線上の物が立体的に分布し二、三日の内に究めることができるのも山である。従って、山角に立つのは、絶対の一端に佇んで、絶対の秘奥を窺うような

もので、人生にこれ以上の喜びがあろうか。山を謳い、山を究めるのは永遠の大事業であり、どうして急を要しないことといえようか。まずは、欧州の『アルパイン・ジャーナル』に習い、山岳専門の機関雑誌『山岳』を発刊し、山岳に関する考察や記事を掲載して山岳趣味と知識の啓発に努めたい。しかし、本会の事業は雑誌発刊に止まらない。山中に登山者のための小屋を建てる、あるいは登山の新路を拓く、あるいは山岳案内記を出版する、あるいは登山者同士の連絡方法を講ずるのもよいだろう。為すべきことは極めて多く、緒についたものは一つもない。これを大成するには、趣味、嗜好を同じくする者の応援を得る以外にない。それは国民的事業であって、けっして少数の者で為し得ることではないからである。大方の賛助を懇請するものである」